直に触れて感じて、五感をフル活用する助産実習の醍醐味

西平朋子（別科助産専攻）

教育上の課題と工夫

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、地域や医療施設での実習や対象者との接触の制限等があり、一部の項目については臨地での演習や実習が展開できずにオンラインでの実施へ切り替えを余儀なくされた。このような中にあっても「助産実習だけは臨地実習で」という教員や実習施設の方々の熱い思いの元、幸運にも全員が臨地で助産実習を展開することができた。臨地実習は、学内で学んだケアの方法について「知る」「わかる」段階から「実際に対象者へ活用する」「実践してみる」段階へ導く、すなわち学内で学んだことを自ら実践し振り返る過程をとおして自分の中に落とし込んでいくための必要不可欠なプロセスである。さらに、分娩介助実習では、知識だけではなく、直に触れて感じて五感をフルに活用しながら実際の産婦と向き合い、母子 2 人の命をゆだねられるというこれまでの実習では経験することがなかった緊張感や不安、責任感を感じながら分娩を介助することになる。さらに、学内演習で習得したはずの知識・技術を実際に活用しようとすると「言うは易し行うは難し」となり、自分に足りないこと・できていないことなどを実感し、学習の必要性を自ら感じ行動していく。学生はこれらの過程を繰り返しながら、対象者との相互関係を築くことの大切さ、助産師としての役割や責任を認識しつつ、助産師としてのアイデンティティを育んでいく。学生は 12 週間の助産実習をとおして多くのことを感じ、学び、大きく成長していく。これこそが実践をとおして経験する「助産実習の醍醐味」ではないだろうか。

2023 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が第 5 類感染症へ移行し、現在収束に向かいつつあり、これまでとは異なったニューノーマルが求められている。助産師教育にとって臨地実習は、助産実践能力を培うために欠かせない基盤となる授業科目である。別科助産専攻では、修了に必要な修得単位数 33 単位のうち実習に係る単位が 11 単位となっており、1/3 を占めている。本県の母子保健の課題解決にむけた実践者としての助産師を輩出するというミッションを遂行するために、臨地実習の意義を考えながらより効果的な学びにつながる実習展開を構築していくことが今後の課題としてあげられる。

教員や臨床指導者が学生にとってよきロールモデルになることが学生の学ぶ意欲や成長、困難な状況をやり抜く力を育てることにつながるのではないかと考える。そのためにも教員自身の実践能力や指導力向上に努めながら、共に実習の醍醐味を伝えていきたい。

コロナ禍の教育活動を振り返って

今回、改めてコロナ禍での教育実践を振り返ることで、コロナ禍にあっても「学生の学びの継続・保障」、「何を継続し、何を改善するか」を考える機会になった。コロナは収束しつつあるが、もうしばらくは、コロナの影響により臨地実習が制限された中で看護基礎教育をうけた学生が別科助産専攻に入学してくる。これまで別科助産専攻の教員が「前例がなければ作ればよい。制約がある中で知恵と工夫を出し合うことで新たな教育の創造につながる」という認識のもとで工夫してきた教授方法や授業内容は今後も活かすことができると考える。